



例 (3)では述語レベルで二つの要素が接続しており、両者はアスペクトの依存関係を有する。つまり様態の移動事象の描写には内核・連位接続の構文が用いられる。そして次に付随の補助関係の移動表現を見る。

- (4) a. S<im>rek isuna idiy kuarto nga mang~mang-an ti tinapay. (付随)  
 <AF.PFV>enter 3SG.ABS DIS.OBL room LIN AF-eat OBL bread  
 ‘He/ she entered the room eating a bread.’

b. 中核・連位接続：[ 節[ 中核[ 内核[Simrek] isuna idiy kuarto] nga 中核[ 内核[mangmangan] ti tinapay]]].

上の例では二つの中核が接続しており、またこの接続レベルで問題となるモダリティの依存関係を有する。よって付随の移動事象の描写には中核・連位接続の構文が用いられる。

最後は原因の補助関係の移動表現である。この種の事象の描写に用いられる構文は単純な階層構造から構成され、いかなる接続も持たない。

- (5) a. Na-i-tayab diay table napkin idiy lamisaan.  
 PFV-CF-fly DIS.ABS table napkin DIS.OBL desk  
 ‘The table napkin blew off the table.’

b. [ 節[ 中核[ 内核[Naitayab] diay table napkin] idiy lamisaan]].

ここまでをまとめると、付随関係は中核・連位接続の構文で表され、様態関係は内核・連位接続の構文で表される。そして原因関係は複雑構造を持たない構文によって表される。そしてそれぞれの構文を(2)の階層に当てはめて分析すると、次の様な統合度の階層が得られる。

- (6) 原因関係 > 様態関係 > 付随関係  
 (単純構造) (内核・連位接続) (中核・連位接続)

最後に、この統語的な階層を動機付ける意味的要素について考察する。三つの補助関係において、移動事象に対してより強い因果関係を持つ共イベントは、因果関係が弱いものよりも強く統合されている。原因関係によって結びついた二つの事象が最も強い因果関係を持ち、そして最も強い統語的統合度の構文で表されている。残りの二つの補助関係を比べると、様態関係によって結びついた二事象は互いに切り離せず、例えば (3)の例では瓶は浮かんでいるからこそ洞窟の外に移動できたと言える。一方、付随関係によって結びついた二つの事象は互いの因果関係が最も弱く、例 (4)では食べるのを止めても、それに関係なく移動は続くものと考えられる。この二つの補助関係においても、因果関係の強弱と統合度の強弱は対応しており、様態関係の方がより強い統合度の構文で表される。つまり、統合される二つの事象は、その関係性によって統語的により強い結びつきで表される場合とそうで無い場合があるということになる。そしてイロカノ語には、Croft et al (ibid.)が主張する「経路と様態の組み合わせの典型性」によって構文のバリエーションが動機付けされているという説明よりも、上述した因果関係の強弱による説明の方がより妥当性があると言える。

## 参考文献

- Croft, W. et al. (2010). Revisiting Talmy’s typological classification of complex events. In H. Boas (Ed.), *Contrastive construction grammar* (201–235). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. / Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press. / Van Valin, R. D., Jr., & LaPolla, R. J. (1997). *Syntax: Structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.